

קֶרֶב (qereb)

— 旧約聖書の人間論用語概念研究 —

大 串 肇*

抄 録

本論は旧約聖書人間論における基本的な諸概念のひとつである קֶרֶב (qereb) を研究することを目的としている。「内臓」という基本的な身体的意味は、旧約聖書では稀であり、実際には犠牲の動物に適用される。קֶרֶב は他の人間論的諸概念 נֶפֶשׁ, רִיחַ, לֵב 等と結び付いている。לֵב も נֶפֶשׁ も、人間の「からだ」、すなわち קֶרֶב の中央に位置している。したがって קֶרֶב は生命の座として理解される。קֶרֶב の中で、様々な思考や感情も考えられている。特に前置詞的な定式 קֶרֶב בְּ (「qereb の中で/に」) は、その心理的な意味を強調する。後代の預言者的終末論的テキストでは、新しい人間の創造に関する神の約束を描くために、קֶרֶב בְּ (「qereb の中に～を与える」) という定式が用いられている (エゼ11, 19; エゼ36, 26; エレ31, 33aβ)。

Keywords : はらわた, 内部, からだ, 旧約聖書の人間論, 生命の座

I 用語の意味・用法

ヘブライ語 קֶרֶב (qereb) は人間あるいは動物の体内にある諸器官を示す用語であり、すなわち「はらわた、内臓」(Eingeweide) と解することが出来る¹⁾。しかし、「内臓」という意味で、実際に人間あるいは動物の身体的器官を示すのに用いられる例証は、旧約聖書では非常に制限されており、

しかも人間に適用されるよりも、動物(犠牲)に適用される方が多い。一般には、人間に用いられる場合、前置詞 בְּ を伴って (בְּקֶרֶב), 漠然と人間の「体内」(im Leib) を示す²⁾。

「肉を食べてはならない。必ず頭も四肢も内臓(קֶרֶב)も切り離さずに火で焼かなければならない。」(出12, 9; P 新共同訳。レビ1, 3; レビ3, 3参照)

* Ogushi, Hajime
ルーテル学院大学
日本ルーテル神学校教授

「動物犠牲」(Pascha-Lamm) の「頭」(Kopf), 「四肢」(Beinen) と קֶרֶב を区別する点だけでは、

ここでは「胴体」(Rumpf: EÜ) と解せるかも知れない³⁾。しかし、ここでも犠牲の諸器官の切断が念頭に置かれていると思われる。例えば「קָרֶבֶת」を覆っている脂肪が「2つの腎臓」、「腰の脂肪」、「肝臓の尾状葉」とともに祭壇で焼かねばならないと、レビ3, 3には記されている⁴⁾。レビ4, 11では、קָרֶבֶת と並んで「皮」、「肉」、「頭」、「四肢」、「骨の中身」が並んで記されている。ここでは明らかに「内臓、はらわた」(Eingeweide)⁵⁾ が考えられている。

従って、קָרֶבֶת は食べることと関連する(創41, 21)。ファラオの夢の中で醜い牛が肥えた牛を食べて、קָרֶבֶת の中に入れたとある。この箇所は「胃」を思わせる。もっともヘブライ語に「胃」はないが、קָרֶבֶת が代理をしている⁶⁾。人間に関して、食事について言及しているのは、ヨブ記20, 14である。

「そうすれば、食物は、はらわたの中に (בְּמִעְיִי) 入って、腹の中で (בְּקֶרְבִּי) まむしの毒に変わるだろう。」

ここで「まむしの毒」(Natterngift) と訳される מְרוֹרֶת פְּתִימִים は、古代においてはへびの「胆のう」(Gallenblase) と考えられていた⁷⁾。つまり、胆汁あるいは胆のうも קָרֶבֶת の中に含まれるのである。また、15節には בֶּטֶן 「腹」(Bauch) が קָרֶבֶת と同義としてあらわれている。14節では、מִעְיִי すなわち「はらわた」(Eingeweide) と同義並行法の中で קָרֶבֶת は用いられている。さらに、この「胆のう」(מְרוֹרֶת) はヨブ16, 13では בְּלִיזֹת すなわち「腎臓」(Nieren) と同義並行法の中で用いられている。そこでは弓が腎臓を射抜くと胆汁が出た、とある。すなわち、これらの内臓器官は、解剖学的に十分に区別されておらず、むしろ同義語として体の腹部の内的器官を示すものとして用いられていたにちがいない。

人間の身体的器官として用いられる第2の例証は、ヤハウィストのエサウとヤコブの誕生記事の中にある(創25, 22)。すなわち、リベカの קָרֶבֶת の

中で2人の子供が押し合うところである。この場合 קָרֶבֶת は「胎内」(Mutterleib) を示している⁸⁾。第3の例証は、古いナバルの死の報告に出て来る(サム上25, 37-38)。ここでは לֵב が קָרֶבֶת の中にある。

「(そして) 彼の心臓 (לֵב) は、彼の体の中で (בְּקֶרְבִּי) 死んだ。そして彼は、石のようになった。」(37節)

לֵב の死、石のように硬直したという記事から、קָרֶבֶת を「胸腔」(Brusthöhle) と考えることも出来ないわけではない⁹⁾。しかし、そうするとナバルの突然の死は、現代で言えば「心臓発作」あるいは「麻痺」(Herzschlag) であろうか¹⁰⁾。しかしそれならば何故ナバルは10日もその後も生き続けることが出来たのであろうか。

H.W.ヴォルフは、ここでは「心臓死」ではなく、「脳卒中」(Schlaganfall; すなわち「脳出血」[Gehirnblutung] を伴う) と考え、10日間の「麻痺状態」(Lähmung) と理解した¹¹⁾。すなわち לֵב はこの場合現代で言えば「脳」の働きを代理しているものであり、当時はそう考えられていたのである。しかしながら קָרֶבֶת は頭とも、あるいは胸とも確実には断定できない。むしろ קָרֶבֶת は「体の内部」(Leibesinnere) であり、לֵב も同様に人間の中心として漠然と体の中心にあるものと考えられていたのではないだろうか¹²⁾。

II 人間論的・意味論的展開

ここでは、קָרֶבֶת の人間論的意味とその役割について述べる¹³⁾。その際、קָרֶבֶת の人間論的意味を考える上で、見逃せない事実¹⁴⁾は קָרֶבֶת が他の主要な人間論的諸概念である נֶפֶשׁ, רִיחַ, לֵב と密接に結び付いて、広範な意味領域に発展していることである。

1. נֶפֶשׁ と קָרֶבֶת 生命の座として

生命の中心器官である לֵב が קָרֶבֶת にある様に、נֶפֶשׁ も קָרֶבֶת の中に宿る。その場合 קָרֶבֶת は生命の座

として考えられている (王上17, 21-22)¹⁴⁾。ここではנִפְשׁוֹが死んだ子供のקֶרֶבの中に帰るように、その母親がエリヤに祈り、それが実現し、その子は生き返った、とされている (22節)。他方、נִפְשׁוֹはקֶרֶבと同義並行法の中に記されている。

「わたしののど (נִפְשׁוֹ) よ、主をほめたたえよ。
わたしの全ての内臓は (כָּל־קֶרֶבִי)¹⁵⁾、聖なる御名をたたえよ。」(詩103,1)

נִפְשׁוֹの基本的意味は、「のど」(Kehle)であり、全ての内臓器官 (קֶרֶבִי כָּל) と共にヤハウエを讃美するように「自己を高揚させること」(Selbstermunterung) に詩編詩人は従事している。多分、死に瀕する病氣、困窮に苦しんでいた詩人が癒され、その体験をヤハウエによる救いと確信し、体全体ですなわちその詩人の全人格をあげてヤハウエを讃美するのである。従ってנִפְשׁוֹは、内なるものの総称として「生命」と訳すことができると思われる¹⁶⁾。

2. קֶרֶב と רִיחַ

次にרִיחַとקֶרֶבの並行について考察する¹⁷⁾。すなわちרִיחַも、קֶרֶבの中にある(入れられる)のである。偶像に関するハバクク書2章19節を除いて¹⁸⁾、人間(民)に関して言及されている例証は、捕囚前のテキストとして(A):イザ19, 3.14;ホセ5, 4。捕囚(後)のテキストとして(B):ゼカ12, 1;イザ63, 11;エゼ11, 19;36, 26-27;詩51, 12が挙げられる。ただし、エゼ11, 19;36, 26-27;詩51, 12はרִיחַとלֵבが並行して用いられているので、第3項でלֵבについて言及した後、まとめて言及する。

テキストAグループについて:

預言者イザヤは、エジプトに対する審判の言葉の中で、彼らの未来の希望の無い状況を次のように語っている;¹⁹⁾

「そしてエジプト人の内(קֶרֶב)にひそむ思い

(רִיחַ)は砕かれるだろう。

わたしが、彼らの企て (עֲצָה) をかき乱すのだ。」
(イザ19; 3a)

ここでは、רִיחַはעֲצָה「(政治、軍事上の)計画」(Plan)と同義並行法の中で記されている。ここではרִיחַはלֵבと同様、思考、判断、認識などの理性の座である²⁰⁾。

従ってここではקֶרֶבは「体」(Leib)の中を示すのとどまらず、人間の(隠された)思考の深さ、あるいは思考の内面性を強調するのに役立つ²¹⁾。つまり、エジプト人の思いや計画は外には秘められたものであったはずである。しかし、それらをヤハウエは、見ぬき、打ち砕くというのである。

残された2つのテキストには、いずれもרִיחַに特殊な名詞が加わった形で用いられている。

「ヤハウエは、彼らの内に (בְּקֶרְבָּם)²²⁾、迷いの霊
²³⁾ (רוּחַ עֲוֵנוֹת)を混ぜ入れた。」(イザ19, 14a)
「というのは淫行の霊 (רוּחַ זְנוּנִים) が彼らの内に
に (בְּקֶרְבָּם)あつて、
彼らは主を知らないからだ。」

(ホセ5, 4b)

ここでרִיחַは人間をある行為に「駆り立てる力」(Triebkraft)である。イザ19, 14aの場合は、ヤハウエがその力を人間の「外から内に」与える主体である。ここでは、ネガティブな力、エジプト人たち(政治的、軍事的に)方向性を失わせる結果をもたらす力である。

ホセ5, 4bは、多少ニュアンスが異なっている。つまりイザ19, 14aのようにרִיחַの主体は明らかにされていない。むしろ、それはすでに民の心の座にあつて、むしろ人間を内から外へ駆り立てるような力である²⁴⁾。ここでは、ヤハウエを知らない事へ、すなわち「淫行」(=バアル礼拝²⁵⁾)へと駆り立てる衝動である。イザ19, 14aのような迷い(不安?)、嫉妬(民5, 14, 30参照)、罪への衝動(ホセ5, 4b)等、人間の深層心理をרִיחַは表わしており、人間の罪の不可解で謎のような

深みを写し出している。従って **קָרֵב** は思考感情の総称としての「内なるもの」(Innere) である²⁶⁾。

テキストBグループについて

ゼカ12, 1では、ヤハウェが「人の**霊** (**רוּחַ**) をその体内に (**בְּקִרְבִּי**) 造られる」とある。**רוּחַ** は、「生命力」を意味する (ホセ2, 19参照)²⁷⁾。イザ63, 11は、旧約の中でもまれな「聖なる霊」について述べている。

「聖なる霊をその内に (**בְּקִרְבִּי**) に置いた者はどこにいるのか。」 (イザ63, 11b β)

イザ63, 7-14では嘆きの中で、ヤハウェの昔の救いの業が回顧されている。ここでは、モーセが特別に聖霊の置かれたイスラエルの指導者と言われている。ここで聖なる霊とは、ヤハウェの働きかけによる力であり、イスラエルの歴史の中で働く力である²⁸⁾。

3. **לֵב** と **קָרֵב**

לֵב も、**קָרֵב** の中にある。しかし **לֵב** が胴体中の内的諸器官の一部として解剖学的知識を提供し得る、あるいはそこから直接身体的意味を推定しようするようなテキストはごく例外に過ぎない (サム上25, 37参照)。むしろ、その知識を暗に前提としつつ、人間の様々な心理学的諸現象を描写するのに役立つ。その意味では **קָרֵב** は「人の内部」(das Innere des Menschen) の総称として理解し得る。しかしながら、**קָרֵב** と **לֵב** の密接に関連した旧約聖書のテキストでは、抽象概念としての人間像ではなく、具体的な外的な身体的状況と対照的に深層心理に及ぶ心理状況とが並んで描かれており、人間の身体と心理が切り離すことの出来ないひとりの人間全体が歴史や事件にいかにかかわるのか、その生の姿が生々と示されていると言えないだろうか。そのような場合、**קָרֵב** の翻訳はそのテキストの文脈にしたがって試みられるはずである。すなわち、場合によっては **קָרֵב** を「体」(Leib) と訳しつつ、人間の様々な心理描写

を表現しうる、注目すべき定式がある。それは **בְּקִרְבִּי לֵב** という定式である。

3-1 **בְּקִרְבִּי לֵב** 定式

「わたしの**心臓** (**לֵב**) は、わたしの体中で (**בְּקִרְבִּי**) ふるえて³⁰⁾ います。

諸々の死の恐怖がわたしを襲ったのです。

恐れと震えがわたしの中に起って来ました。驚きがわたしをおおったのです。」(詩55, 5-6。詩109, 22b参照)

この個人の嘆きの歌に属する詩編55の詩人は、死に瀕するような不安をこの様に描いている。直接の原因は、46節から同胞(14-15節)である、敵の「のろい」と「中傷」(Verleumdung) の言葉であった。

「ヤハウェよ、見て下さい。わたしにとっていかにそれが不安かを。

わたしの**内臓** (**בְּטַעַי**) は煮えかえり、

わたしの**心臓** (**לֵב**) は、わたしの体内で (**בְּקִרְבִּי**) ひっくりかえています。

というのは、わたしがあまりにも強情であったからです。

外では剣が子供たちを失わせ、内では死のようです³¹⁾。」(哀1, 20)

この哀歌の一節は、エルサレムの多大な崩壊を前提にしている³²⁾。そこで、自分(たち)にふりかかった、この災いを神の審判としてとらえている。この苦悩を身体的用語を用いて描いている。

最初の **בְּטַעַי** 「(わたしの) はらわた」(Eingeweide) は、**קָרֵב** と同意語である。**חַמַּר** *poalal* 「煮えかえる」(glühen, brennen³³⁾) は「興奮」や激痛による「(心の内の) 胸騒ぎ」(Gären des Inneren) を示している³⁴⁾。

次に同じく哀歌1章20節 a β は、20節 a α と同じ様に心の激しい高ぶりが示されている。「心が転覆する」**הִפְךָ** (nif) + **לֵב** という定式は、その他出14.5b (J)³⁵⁾、ホセ11, 8に出て来る。哀歌

と同様、出14, 5 bではファラオがイスラエルの民の逃亡の知らせを聞いて、彼らを労役から解放したことを悔いるところである。すなわち「心が転覆する」とは、不安や驚きというよりは、ある反省に基づいた「後悔の念」(Empfindungen der Reue)を示している³⁶⁾。

哀歌では「心の転覆」定式の後、「なぜならば」(מַדּוּם)という接続詞による導入句によって、苦しみ(捕囚)をもたらした災いの原因について内省されている。すなわち、ヤハウエに対して強情であったと。やはり、ここでも心の痛みとしての「後悔」(Reue)が示されているのである³⁷⁾。

EÜはקָרַבを「胸」(Brust)と訳しているのに、קָרַבを「胸」と訳さず、「(わたしの)体の中に」(im Leibe)と訳す(Luther訳と共に)。しかし、そもそもקָרַבは胸ではない。むしろ、「はらわた」(Eingeweide), 「腸」(Gedärm), 更に「体」(Leib), 「内部」(Inneres)である³⁸⁾。新共同訳は不明だが、もし各々の用語の特徴を生かすならば、口語訳が比較的正確に訳しているように思われる。すなわち、

「主よかえり見て下さい。わたしは悩み、わがはらわたはわかえり、わが心臓はわたしの内に転倒しています。」

しかし、もし上記のようにקָרַבの内臓器官としての意味を際立てるならば、私訳で示した様に、(קָרַב)を「(わたしの)体内に」(im Leib)とした方が、徹底しているように思える。

他方、この哀歌のテキストでは後悔のみならず、現実の差し迫った死の恐怖がこの嘆きの誘因にもなっている(20節b)³⁹⁾。いずれにせよ、これらのテキストでは嘆きの原因としての後悔や死の不安が、身体的特徴(症状)を伴って、生々と描かれている。קָרַבは、その心理的内面性を強化するのに役立つのである。

この最適の例として、預言者エレミヤが、自分の語るべきヤハウエの言葉に直面し、すなわち恐ろしい神の審判の言葉にふれた時、すでに墮落し

た、救われがたい民の現実を前にして絶望しつつ、次の様に語っている。

「預言者たちについて

わたしの心臓(קָרַב)はわたしの体内で(בְּקִרְבִּי)破裂し、わたしの骨(עַצְמוֹתַי)は、すべて震えている⁴⁰⁾。

わたしは泥酔した者ようになった。酒に負けた者のようだ。

ヤハウエの前で、

その聖なる言葉の前で。」(エレ23, 9)

この「心の破れ」、骨の震え、そして泥酔の描写はともに、預言者の強烈な驚きを表わしている⁴¹⁾。「心の破れ」によって民の現実(腐敗)に対する失望が表されているのだろうか。

しかし、ここでエレミヤが実際に何に驚き、あるいはショックを受けているのか、釈義家の間には見解の相違がある。すなわち、審判の言葉(内容)であるとか、神の怒りによるものであるとか⁴²⁾、あるいは民の腐敗の現実によるものであるとか⁴³⁾さらには神との出会いによる罪人としての預言者の認識⁴⁴⁾が示されていると考えられたのである。一方、B.ドゥームのように、民の腐敗の発見と驚きを強調するがゆえに「ヤハウエの前で、そして彼の聖なる言葉の前で」の章句を「注解」(Glosse)として本文からははずす者もいた。

他方、P.フォルツは若きエレミヤが重い委託としての審判宣教の前に驚いているとしている。純粋な若者が、ここでためらいおののく姿が示されているとする。W.ルードルフは、P.フォルツの見解に従う。ここでは民の現実ではなく、不可避となった審判に驚いているとする。こうしてP.フォルツ、W.ルードルフ、A.ヴァイザーは、それぞれ異なった根拠からエレ23, 9以下を初期預言と考えたのである。

もちろん、本文上の問題として「ヤハウエの前で……」以下を削除することは不可能である。民の現実の腐敗、神の怒り、審判を内容的に切り離すことはできない。「心の破れ」(あるいは「骨の

震え)は、後述するように「絶望」の表現である。ただし、ここでは明らかに民の現実に対してであり、詩編のように自己に対する絶望とは異なっている。つまり、民に対する絶望は、神の審判という「未来確認」(Zukunftsgewißheit)から生まれていると解すべきではないだろうか。שבּרはエレミヤの嘆きの中で、エレ8, 21に現れている。そこではすでに起きた審判の現実(前597年?)を前提にしているように思える⁴⁵⁾。民の滅亡がエレミヤ自身の恐怖となっている。エレ23, 9以下は未来預言でもあるゆえに異なるが、エレ8, 18-23が未来の預言であると考えられる積義家もある⁴⁶⁾。

3-1-1 「心の破れ」 שבּר־לֵב 定式

この「心の破れ」 שבּר־לֵב 定式は、この箇所以外に、詩69, 21; 147, 3; エゼ26,9 (qal)⁴⁷⁾; イザ61, 1; 詩34, 19; 51, 19 (nif.)に出て来る⁴⁸⁾。

この中で動詞の分詞形・複数・合成形 (qal passive あるいは nif. pt. pl. cstr.) と לֵב が Constructus - Verbindung の形で結合し、すなわち「心の砕かれた者たち」(die Zerbrochenen (des) Herzens) を表わす定式は注目すべきである(詩147, 3 qal passive その他 詩34, 19とイザ61, 1は שבּר nif.)。これらのテキストは全て比較的后代のテキストすなわち(捕囚) 捕囚後のテキストである⁴⁹⁾。

詩147, 3「心の砕かれた者たち」は2節の「イスラエルの追いやられた人々」(גֵּרֵי יִשְׂרָאֵל)に対応している⁵⁰⁾。そして彼らは今や故郷エルサレムに集められている。これがこの「賛美の歌」(Loblied)の第1の賛美の「内容」(Durchführung)となっている。すなわち、捕囚を体験した人々、エルサレム捕囚共同体が念頭に置かれている。第Ⅲイザヤは、この共同体に対して慰めを告げなければならないという自分の職務を明確に認識している(イザ63, 1; ここでは、「心の砕かれた人たちは」、「捕らわれ人」、「つながっている人」と並んで記され、彼らに「自由」と「解放」を告知する指名について語られている。しかし、彼らは、捕囚民ではなく、また捕囚からの解放を第Ⅲイザヤは目指しているのではな

い。ここでは罪の解放が考えられている⁵¹⁾。「心の砕かれた者」への約束は、詩34, 19の場合はひとつの教訓の中で語られている。

「ヤハウエは、心(לֵב)の砕かれた者たちの近くにいます。そして彼は、魂(רוּחַ)の打ち砕かれた者たちを助ける。」(詩34, 19)

この「心の砕かれた者たち」(נְשַׁבְּרֵי־לֵב)と「魂の打ち砕かれた者たち」(רוּחַ־נִכְרָסִים)とは16節, 20(22)節の「義人」(צַדִּיקִים)に対応している。このצַדִּיקִיםは、苦難を負っている人々でもある。彼らは、主に助ける敬虔な人々である。あるいはそうせざるを得ない人々である。つまりこの関連で、「心の砕かれた者たち」とは、自分自身あるいは自分の生涯に完全に絶望している人々である⁵²⁾。לֵב, רוּחַ は共に「自分に対する信頼の徹底的な破滅」(Zusammenbruch des Selbstvertrauens)や「卑下」あるいは「謙遜」(Demut)を示す⁵³⁾。そこに唯一神にのみ、期待と信頼が寄せられるのである。従って詩51, 19では、神に喜ばれる犠牲として「打ち砕かれた魂」(רוּחַ נִשְׁבְּרָה)が詩34, 19と同様 לֵב と並んで(ここでは לֵב־נִשְׁבָּר nif. pt. שבּר が形容詞的に לֵב を修飾し、「砕かれた心」を表わしている)出て来ている⁵⁴⁾。

「神のいけにえは、砕かれた魂です。

神よ、あなたは、打ち砕かれ、破れた心を軽んじません。」

3-1-2 「骨」(עֲצָמַי) と 「心」(לֵב)

לֵב は、人間の生命の中心的器官である。他方、骨も人間の(動物の)基本的部分である。この二つの器官が、並んで旧約聖書に出てくる場合⁵⁵⁾、それらはともに人間の心理的状态、特に「諸感情の座」として機能する⁵⁶⁾。

エレ23, 9と非常によく似た個人の嘆きの歌に属する詩22の詩人は、多分死に瀕する病気に苦しみ(7-8節, 19節)、敵の非難を受けて、次のように述べる。

「水のように、わたしは注ぎさられた。
そして、わたしの骨(עצם)は、ことごとく
ばらばらにはずれた。
わたしの心臓(לב)は、ろうのようになって、
わたしの体内(בשר)で溶けた。」(詩22, 15)

ここでは、あたかも熱病によって体が衰弱したことを、骨がばらばらになったという表現から思わせる(詩102, 4-5参照⁵⁷)。他方「心臓(לב)が「溶ける」(נִמַּח nif.)という定式は、ヨシ2, 11; 5, 1 (ともにנִמַּחが並行する); 7, 5; イザ13, 7; 19, 7 (בְּקֶרֶב לֵבで); エゼ21, 12; ナホ2, 11に出て来る。それらは、主に戦争と関連して勇気の喪失を意味する⁵⁸)。

「エジプト人の勇氣(לֵב)は、その体(קֶרֶב)の中で⁵⁹ 溶けるだろう。」 (イザ19, 1)

他方、骨は他の肉体的器官と並行して記されている時、「人間存在」(Wesenheit), すなわち人間全体を示している⁶⁰)。

「目の光」は、心(לב)を喜ばす。
良い知らせは、骨(עצם)を新鮮にする。」
(箴15, 30)

第1節は、「見ること」(Sehen)から、第2節は「聞くこと」(Hören)から、人間の喜びについて語っている⁶¹)。ここで明らかなことは、心理面のみならず、人間の身体に喜びがある効果を及ぼすこと、すなわち生命力を与えることを示している(イザ66, 14参照)。

預言者エレミヤは、神の言葉に対して、心のみならず、体全体(「骨」= עצם, 「体」= קֶרֶב)で向かい合った、すなわち、一人の人間全体、全人格をもって彼は、民の腐敗の現実に神の審判を告知しなければならなかったのである。エレ23, 9以下に記された「預言者の託宣」という独自の収集の中で、エレミヤの嘆きが冒頭に置かれている意義は少なくない。すなわち、(後になって)主題

として明らかとなる偽預言者の問題について、この真実の預言者の姿は、偽預言者とは全く対照をなす。すなわち彼らは「自分の心の幻を語っている」(16節)に過ぎない(26節参照)。偽預言者たちのלבが、願望の座と化しているのである。他方、エレミヤは、自分のלבのみならず、קֶרֶב, עצםでもヤハウエの審判の言葉を受けとめている。民への絶望と審判の恐れへの驚きの声と叫びが共鳴し、不可避となった審判を明らかにしているのである。そして、そこに自分も属する民にまさに審判が下ることへ、全人格をかけている真実の預言者の姿が写し出されている。骨と心の密接な結び付きの描写は、告白録のエレ20, 9にも記されている。すなわち神の言葉(=審判宣教)は、エレミヤの心の中でひとつの強制力となり、炎となって彼を苦悩の道に(再び)駆り立てているのである。

3-2 同義並行法におけるלבとקֶרֶב

קֶרֶבは、לבと同義並行法の中で用いられている。⁶²

「人は、われわれの秘密^{a)}を見破れるだろうか。われわれの陰謀は、巧妙で完璧だ^{b)}。
『心(קֶרֶב)は病んでいる^{c)}。
だが、それ(לב)を探し出すことはできない』
と」(詩64,7)⁶³

7節bは古い知恵の格言に遡るかも知れない⁶⁴)。いずれにせよ、ここでは詩人の敵が、自分たちのעֲשָׂה「陰謀」(Anschlag)の巧妙さ、完全さを誇るための根拠として引用されている。すなわち、ここではקֶרֶבとלבは同義であり、人間の隠された思考、計画、陰謀の座となっている⁶⁵)。従って、קֶרֶבはלבと並んで「内部」(Innere)と訳せるだろう。しかし、לבと全く同義として、קֶרֶבは単独で人間の隠された思考の座として用いられている。多くの場合、詩64, 7と同様、個人の嘆きの歌に出て来ており、口、舌の巧妙さと並んで、קֶרֶבにひそむ詩人の敵の「偽り」(Lüge)が示されている。

二つの語の並行句の場合、ドイツ語では前者を“das Innere”, 後者を「心」や「心臓」を意味する“Herz”と訳すことが出来る。しかし、日本語の場合、翻訳上の問題が出て来る。というのは、思考と言うよりは人間のは感情の総称として「心」に対応し匹敵する概念が「心」以外にうまく見つからないからである。「魂」を考え直す方が良いだろうか。しかし、これは明らかに「精神」の意であろう。むしろ2つとも「心」と訳すべきかも知れない。

「彼らは (=敵), 彼らの⁶⁶⁾ 口先では、祝福している。

だが、彼らの心の中では (בְּקִרְבָּם) のろっている。」 (詩62, 5)

この場合、בְּקִרְבָּםはלבと同様、ドイツ語では“Herz”と訳しうる。詩人は、敵の「偽り」(Lüge), 「中傷」(Verleumdungen) の中に心の腐敗を見ぬく。

「彼らの口⁶⁷⁾ には、真実がない。
彼らの心 (בְּקִרְבָּם) の中は、腐りきっている。」 (詩5, 10)

同様に、エレミヤも語る。しかし、その鋭い指摘は、民全体に向けられている。

「その舌⁶⁸⁾ は、人を殺す矢である。
その口から出る言葉⁶⁹⁾ は、欺きである。
人は穏やかに、隣人と語り合っている。
だが、その心 (בְּקִרְבָּם) の中では、陰謀を企てている。」 (エレ9, 7)

エレミヤは9, 1-8で民の「腐敗」(Verderbenheit) を嘆き、その罪を告発する。人間間の「不信」, 「不誠実」(Treulosigkeit), 「偽り」(Lüge :שָׁרָה 2節a及び4節b), 「欺き」(Trug :חָרַג 4節及び5節a), 「悪事」(Bosheit) (2節b) は民の共同生活を破壊しているだけではない。他ならぬヤハウェを知ることの拒否である (2節b)。エレミヤ

の告発は、「舌」(לְשׁוֹן) の罪から始まる (2-4節及び7節)。「舌」も「口」(פֶּה) も彼らの「中傷」(Verleumdung) や欺き、偽りの武器と化している。7節bは7節aの補完として、アンティテーゼ的な並行法の中で、口先だけの「平和」(שָׁלוֹם) の下に隠された心の中の「陰謀」(Hinterlist) について言及している。בְּקִרְבָּםは「偽り」(בְּקִרְבָּה 5a, 7a) の温床になっているのである。残されたבְּקִרְבָּםとלב同義並行法の例証は、いずれもエレミヤ書にある。

「エルサレムよ、あなたの心 (לב) の悪を洗いなさい。

あなたが救われるために。

いつまで、あなたの内に (בְּקִרְבָּךְ) 悪い思いをとどめておくのか。」 (エレ4, 14)

14節aの勧告の様に思える心の浄化の要求は、14節bの嘆きあるいは4章5節以下の審判告知の文脈から、その促し効果は最初から望めないことが分かる。つまり、ここには独特の仕方でも浄化しがたい罪の深さが証示されているのである (エレ2, 22参照)。לבとבְּקִרְבָּםはこの場合、同義である。מַחְשַׁבְתָּהּ (心の中の)「考え」(Rechnen, Planen) が「救いがたい」(heillos) あるいは、「悪い」(schlecht) ののである (14節b)。それが「心」(לב) の悪である (14節a)。לבとבְּקִרְבָּםは、人間の思考の座として同義である。ところが、エレミヤ書には、この審判の言葉とは全く対照的な希望が記されている。

III 救済預言—新しい人間の創造

「わたしはわたしの指示を彼らのうちに (בְּקִרְבָּם) おき、彼らの心に (עַל-לִבָּם) それを書く。」 (エレ31, 33a)

ここには二つの異なった表象、二つの行為が、並行文の中で密接に連関して神のひとつの行為として描かれている。すなわち、律法を置き、書く

という行為が人間（民）の心の中で、そして心の上で起るのである⁷⁰⁾。

このエレ31,33aの **לֵב**（又は **קֶרֶב**）の人間論的機能を特定するために、31-34節の文脈を無視しては不可能である。というのは、ここではこれらの人間論的概念は、「隠喩的」(metaphorisch)に用いられているからである。すなわち、新しい契約の新しさは、その内容の新しさにあるのではなく、その契約締結の方法、様式の新しさである。今まで律法が石や板の上に書かれたのとは違って⁷¹⁾、人間の内部に置かれ記されるというのである。しかし、これは単に形式が新しくなったというだけにとどまらない。

要求として、民と対峙していた律法が、民の自発性において達成されるのであり、神の意志と人間の意志とが神の新しい行為によって達成されるのであり、神の意志と人間の意志とが神の新しい行為によってひとつになるのである。ここには明らかに、民は罪によって一方的に従来の律法を実現せず、むしろ一方的に破棄してしまったという前提がある。だからこそ、新しい神の行為が、神への従順の新しい可能性を唯一切り開くのである。

この神の新しい行為は、当該テキストの33節aβでは（目的語を伴って）、**וְנִתְּנָה לְבָבְךָ** という定式が示している。この定式は、旧約の中で唯3箇所しか出て来ない。すなわち、エゼ11, 19；エゼ36, 26；エレ31, 33aβである⁷²⁾。

エゼキエル書の二つの例証には **וְנִתְּנָה** の目的語としてトローラーではなく、その代わりに「新しい霊」が記されている。しかし、「新しい霊」(と「心」)の授与の約束はたとえ律法と記されてはいなくとも、ヤハウエの戒め（「掟」と「法」11, 20 = 36, 27）への完全なる従順の達成を旨としている点では共通している。

さらに、「心の上 (**עַל-לֵב**) にトローラーを記す」(33節aγ) という表象はエレ17, 1「罪が心の板に刻まれている」と同様の隠喩的な表現を想像させる。そこでは、罪が消すことの出来ない程、民の心に潜んでいることをエレミヤは指摘し、審判の不可避の理由付けとして告発したところである

(エレ4, 14参照)。エレ31, 33aγは明らかにこの表象とは全く対照をなす描写である。従って罪に対する預言者の人間論的洞察が、エレ31章における新しい人間像の前提にあると言えないだろうか。

「わたしは、彼らにひとつの心 (**לֵב**) を与え、新しい霊 (**רוּחַ**) を彼らの体の中に (**בְּקֶרְבָּנָם**)⁷³⁾ 授ける。

そして、わたしは、石の心 (**לֵב**) を彼らの体から (**מִבְּשָׂרָם**) 取り去り、彼らに肉の心 (**לֵב**) を授ける。」

(エゼ11, 19。エゼ36, 26；18, 31参照)

19節aa (MT) の **לֵב אֶחָד** 「ひとつの心」(einziges Herz) の **אֶחָד** は、「意見が一致の」(einmütig)⁷⁴⁾ という意味である(代上12, 39；エレ32, 39参照)。非常に理解しにくいだが、ここでは散らされた(捕囚)民の状況(17節)を念頭に置いて、神への従順へ民の心がひとつにまとまるということを約束しているのだろうか？

LXXは、**לֵב אֶחָד** 「ひとつの別の心」(ein anderes Herz) とし(サム上10, 9参照)、また、SとTは、**לֵב הַרְשָׁה** 「ひとつの新しい心」(ein neues Herz) とする。エゼキエル書中の並行箇所36, 26と18, 31では (MT)、**לֵב הַרְשָׁה** と読んでいところから、この読み方はかなり有力と思われる。いずれにせよ、このエゼキエルの救済預言は、ほぼ文字通り(19節aaを外して) エゼ36, 26に採用されている。そこでは、明らかに捕囚が前提にあり⁷⁵⁾、民が(祭儀によって)清められるという約束と並んで、「新しい心」と「新しい霊」の授与の約束が語られる(詩51, 12参照)。

ところで、エゼキエル書において **לֵב** は **רוּחַ** と並んで重要な人間論的概念である。預言者エゼキエルの審判宣教に見られる鋭い人間論の見識は、この新しい約束の理解への前提となっているように思える。

すなわち、エゼキエルは、ヤハウエに聞き従わない民を容赦なく、「反逆の家」(エゼ3, 9；2, 5. 6. 7)と呼び、彼らの強情を罪の本質として見抜

いていた(3, 7:2, 4付加?)。また、民の心は偶像に誘惑されてしまっていたと告発する(「姦淫の心」6, 9)⁷⁶⁾。これが前587年の捕囚をもたらした原因である⁷⁷⁾。従って自分たちの力では民は神に従順になることができないことが明らかになったのである。だからこそ、神による新しい心(と霊)の授与によってのみ新たな救いの可能性が開かれるはずである⁷⁸⁾。この思考の展開は、エレミヤ書の審判預言そして救済預言の用法の中でも見られる(エレ17, 1; エレ31, 33a参照)。19節bは、新しい心の授与について、独特な、しかも隠喩的な叙述でさらに詳しく描いている。

「石の心」とは、すでにエゼキエルが指摘した様に、強情で反逆な民の意志であり、それゆえ偶像の誘惑に打ち負けざるを得なかった彼らの罪、すなわち死を象徴する(サム上25, 37-38)。他方、神は、それを「体」(קֶבֶד)から取り去り、「肉」(בָּשָׂר)の心を授けると言う。「肉の心」とは生命力に満ちた神への従順を志す、意志である⁷⁹⁾。ここでは、民全体がひとつの体と考えられており、「その体の中に」(בְּקֶרְבִּי 14節a)「与え」、「その中から」(מִבְּשָׂרִי 14節b)「取り」、「与える」神の新しい御業が語られる。そして人間の生命の中心器官である לֵב の変革が起るのである。この場合も、קֶבֶד (Körper), קֶבֶד (Leib) は、לֵב (רוח) とは対照をなすとともに、ヤハウェの新しい行為の起る空間、すなわち、人間の内部意志の中心にその変革が起ることを示し、しかもそれは、「体」(Glieder)としての民の個々人に及ぶのである。

注目すべきは、לֵב と並んでエゼキエルにとって「意志の中心」(Willenszentrum)としてのרוחがここで用いられていることである⁸⁰⁾。「新しい心」と並んで「新しい霊」とは、「新しい意志の中心」(ein neues Willenszentrum)⁸¹⁾、「新しい思い」(eine neue Gesinnung)⁸²⁾、「恒常的な意志の力」⁸³⁾(die dauernde Willenskraft)であるばかりでなく、これは、人間の外から働きをかける、そして神への従順へ人を駆りたてる力である。それは、まさしく、人間が未来を持ち合わせ、いつでも自由になるものというものではなく、神に

よって与えられる生命力に他ならない。エゼ36, 27にはそれをヤハウェの霊として補充し、説明しているのは正当である(エゼ37, 14参照)。このוְיָתַדְבַּרְתִּי בְּיָדְךָ という定式は、前述の如く、旧約聖書ではただ3ヶ所しか見られない。すなわち、エレ31, 33aとエゼ11, 19及びエゼ36, 26である。いずれも、終末論的約束の中に出て来る。そして、人間の内部に起る新しい出来事が、ヤハウェのイニシアティブに帰することを端的に示している。もちろん、エレ31, 33aでは、רוחの代わりにתורה「(ヤハウェの)律法」が記してある。だが、エゼキエル書の2ヶ所には、「律法」は記されていないが、「新しい心」と「新しい霊」の授与によって神の戒めへの従順は、もはや要求としてではなく、その実現が約束されている点で、エゼキエル、エレミヤ書ともに共通する。また、エレミヤ書でרוחが欠けているのは、理由があるように思える。記述預言者(捕囚前)には、全体としてרוחはあまり重要な役割を果たしていないことも事実だが⁸⁴⁾、エレミヤ書の場合は、特に意図的と思える程、その例証はごく限られたものとなっている⁸⁵⁾。恐らく、偽預言者の問題が背後にあると考えられる。これは、エレミヤ書の重要な問題であったことは明らかである。そもそもוְיָתַדְבַּרְתִּי定式は、預言者の啓示受領と関係していたらしい(民11, 29)；そこでは、預言者の外見的特徴として、霊の授与によるエクスターゼ状態について、言及されている。捕囚(後)になって、この用法が再び採用された(エレ42,1)⁸⁶⁾。

しかし、エクスターゼ現象とは切り離され、あるいは預言者だけに与えられる特殊な、ヤハウェによる「全権」(Vollmacht)の委譲を示すのに限られず、終末時における全ての人々に与えられるヤハウェの力として描かれる(ヨエ3, 1-5。エゼ37, 14参照)。エゼキエルの約束は、まさにその先駆けであり、おそらくエレミヤ書は、偽預言者の問題にかんがみて、רוחだけをういかなかったと考えられる。

いずれにせよ、וְיָתַדְבַּרְתִּיによって、(外から)神の人間に働きかける、積極的な「活動」

(Bewegung) がここに示されているのである。そして同時に、これは人間とヤハウェとの「共同性」(Gemeinschaft) の直接性を明白にしている。エレミヤ書の場合、確かにホセアと同様、トラーの責任を祭司に置いている箇所もある(エレ2章)。しかし、ここでは祭司について言及されてはいない。しかも、34節では、(ここでは「ヤハウェを知ること」)互いに教え合う必要もなく、この新しい神と民との共同性は実現するのである。

このエレミヤ書、エゼキエル書における終末論的約束を受容しつつ、あるいは前提にしつつ、後代の詩51の詩人は以下の様に祈る。

「神よ、わたしに清い心(לב)をお創り下さい。
わたしの内(בְּקֶרֶבִי)に新しい確かな霊(רוח)を授けて下さい。」
(詩51, 12)⁸⁷⁾

注

- 1) S.Ratray/J.Milgrom,ThWAT VII, 161 によれば、ATにおけるקֶרֶבの例証は227回である。קֶרֶבの意味に関しては、同161-165を参照。更に H.W.Wolff, Anthropologie,102:「体の内的器官のための空間が先ずケレブと呼ばれる」。HAL 1059によると、קֶרֶבは1) 体の内部(はらわた) 2) 一般的な意味で(人間の) 内部 3) 生命の座 4) 感情や才能等の座として理解される。
- 2) ドイツ語でEingeweideは「内臓」,「はらわた」である。日本人にとって「はらわた」とは、腹部の「腸」を想像させる。腹部内のみならず、胸部内を示す言葉である。קֶרֶבは確かに下腹部内諸器官と密接に関連する; מְעֵים / מְעֵים (Eingeweide,Gedärm), בֶּטֶן (Bauch), קְלֵיֹת (Nieren) (腎臓)。しかし、「胸部内」(Im Burst)を示すと思わせる例証がある。それはלבがקֶרֶבの中にあると言われている場合である。しかしלבが胸の中にある事自体に問題がある。そしてקֶרֶבが単独で「胸」を表わしたり、それを代理したりしている箇所はない。従ってקֶרֶבは「腹」(Bauch)と訳すべきだろうか(בְּקֶרֶבִי=im Bauch)。翻訳上、「腹の中に心」とは訳せないのでבְּקֶרֶבִיは一般的に人間の「体内」(im Leibe)と訳す。
- 3) しかし、出29, 17 Eingeweide: EÜ.
- 4) Šelāmim Opfer:「קֶרֶבを覆っている脂肪」(牛)「קֶרֶבに付着している脂肪」:レビ3, 3, 9(牛). 14(山羊); 4, 8(牛); 8, 25(雄牛)。更にレビ8, 16(牛):出29, 13(牛)参照。
- 5) S.Ratray/J.Milgrom,ThWAT VII, 162によれば「臓もつ」(Innereien)だが、この訳語はドイツ語では動物犠牲のみに用いられる。
- 6) קֶרֶבを「腹」(Bauch)とEÜは訳している。新共同訳も同様。Gesenius17版は「腹腔」(Bauhöhle)と訳している。
- 7) HAL 604; G. Fohrer KAT 330; מְרֹרֶה「胆のう」(Gallenblase)についてはHi20, 25; Hi16, 13を参照せよ。
- 8) EÜ及びGeseniusを参照せよ。
- 9) HAL, Gesenius17版あるいはEÜは「胸」(Brust)と訳している。
- 10) H.-J.Fabry, ThWAT IV, 424; F.Stolz, THAT II, 861参照。
- 11) H.W.Wolff, Anthropologie, 69.
- 12) HAL 1059:ウガリット語 grb は単に体の「内部」[中央](Körpermitte),アッカド語qerebu (m), qarbumも、「内部」(Inners),「中央」(Mitte)を示している。
- 13) קֶרֶבの空間的地理的用法、また「~の中に」という前置詞の用法あるいはこれらの神学的(宗教的)転用についてHAL, Gesenius等の辞書や事典を参照。
- 14) ここではנְפֻשׁ呼吸機能を考えて、קֶרֶבは「肺」と考えられているのではないだろうか。S.Ratray/J.Milgrom,ThWAT VII, 162:「ここではその子どもが呼吸することを停止しなければならなかったゆえにケレブはここでは肺に相当すると思われる(17節)」。だが、最も単純に解釈すれば「生命」(das Leben)が人間の「内」にあると単に考えていた、と指摘する。
- 15) BHS参照。
- 16) H.W.Wolff, Anthropologie ,47-48; H.J.Kraus, BK XV/2 872参照。
- 17) イザ26, 9は、本文上の問題があり、この考察から省く。BHS及びH.Wildberger ,BK X/2, 983参照。
- 18) ハバ2, 19は木や石でつくられた偶像について次のように言われている。すなわち、「見よ、それには金や銀がかぶせられているが、その中には(בְּקֶרֶבִי)息が全くない。רוחがないことは「息」がないことであり、「生命力」(LebensKraft)がないということである(H.W.Wolff, Anthropologie, 59参照)。
- 19) イザ19, 1b-4. 11-14の真正性に関しては,H.Wildberger, BK X /2, 707を見よ。
- 20) HALによると、קֶרֶבは「理解」の座として見なされている; H.W.Wolff, Anthropologie, 67; W.H.Schmidt, Anthro. Begriffe, 383; A.R.Johnson, Vitality 34

- 以下：J.Scharbert ,FSA.Deissler 89；R.Albertz/
C.Westermann, THAT II (תַּיִר), 739-740参照。
- 21) ドイツ語では「im Inneren」と訳せる。これは人間の思考感情の総称として用いられる。
- 22) BHS参照
- 23) “Geist des Schwindels” (W.H.Schmidt, Anthro. Begriffe, 383) ;“Geist des Taumels” (R.Albertz/
C.Westermann,THA II ,740) ;“Schwindelgeist” (J.Scharbert , FSA.Deissler, 87) .
- 24) H.W.Wolffはホセ5,4bのכֹּחַを個人の最も深い「内部」(Innereste)と見ず、民の「中心」(Mitte)、つまり民の指導者たちを示していると考え(創24, 3；民5, 27；サム上16, 13)。כֹּחַのみがホセアにとって、個人の中心であるからだと言う(H.W.Wolff,BK XIV /1,104-105)。しかし、その挙げた例証とホセ5, 4bは、同一でなく、不確かである。しかも「民の中心」が必ず指導者たちであることを証明するテキストはない。
- 25) ホセ4, 12参照。確かに、ここではバアル礼拝へのあこがれが考えられる。「淫行」と言う言葉からそのあこがれが性的衝動にも似たものであることが言い表されている。
- 26) H.W.Wolff, Anthropologie, 103.
- 27) H.W.Wolff, Anthropologie, 59参照。
- 28) C.Westermann, ATD 19. 306以下；特に309；J.Scharbert, FSA.Deissler ,93参照。
- 29) エレ23, 9；詩39, 4；55, 5a；102, 22b；イザ19, 1；サム上25, 37；哀1, 20.
- 30) BHS参照；H.J.Kraus,BK XV /2,919参照。
- 31) MT：「家の中では死のようだった」。H.J.Krausは(BK XX 523),אֶתを削除する。他方,W.Rudolph (KAT208)は、アッカド語kamututaから“Gefangenschaft”と読む(כַּוְנָה)。
- 32) もっともこの破局の状況が前597年の第1回捕囚か第2回のもの(前587年)を示すかは議論が分かれている。これに関してはH.J. Kraus, BK XX,24参照。
- 33) HAL 317参照。
- 34) 哀2, 17参照。及びH.J. Kraus, BK XX, 33参照。
- 35) 資料区分についてM.Noth,ATD 5, 83参照。但し、M.Nothによれば5節aはElohismに区分されている。
- 36) H.J. Kraus, BK XX, 34参照；J.Scharbert, NEB 24, 17；M.Noth, ATD5, 83参照。
- 37) ホセ11, 8では、この用法が神の「心の悔い改め」(Umkehr des Herzens)に転用されている。ここでは神の審判が、その「憐れみ」(Mitleid)と「後悔」(Reue)によって、すなわち無条件の愛によってその審判がくつがえされ、怒りの決定が終わる。H.W.Wolff (Anthropologie, 94), LXX, Vによれば niḥûmîmは「彼の後悔」と訳され、「それが燃え上がる (entbrennt)」と訳される。J. Jeremias, ATD24, 1, 139参照。
- 38) HAL 577参照。
- 39) H.-J.Fabry, ThWAT IV, 429参照。
- 40) qal形(“schlottern”, “weich”：Gesenius旧版)の例証は、旧約ではこの箇所のみである。piel形では、申32, 11と創1, 2にあるが。B.Duhm (183)はほぼGeseniusに基づいてアラブ語rahafu から類推した。確かにこのqal形の意味は不明確である(P.Volz 234)。W.L.Holladayはアラブ語からの推論と並行箇所である詩22, 15のחַיִּי hitp.から考えて、(weich = weak)と訳している(I 626)。口語訳では、「震える」と訳している。新共同訳では「力が解けた」と訳している。「骨が弱くなる」とは、骨が解体することである。「骨が震える」とは、恐怖で身体が震えることを想像させる。しかし、骨の解体の一表現として「震える」と考えることは出来ないであろうか。
- 41) F.Giesebrecht 129参照。
- 42) F.Giesebrecht 129,P.Volz 235,W.Rudolph 150,J. M.Berridge 182-183,W.L.Holladay I 625.
- 43) B.Duhm 182;J.Bright 154,J.A.Thomson 493,J. Schreiner I 137.
- 44) A.Weiser I 201.
- 45) P.Volz 111 (前597年の災いではない)；W.Rudolph 64-65(飢饉)；J.Bright(前598/7年の災い)；J.P.Hyatt 886 (飢饉)。
- 46) B.Duhm 92;A. Weiser 75;W.L. Holladay I 288；J. Schreiner I 89,N.Ittmann、Konfessionen,23-24；W.Mckane I 185.
- 47) MTではnif.形だが、これでは読めず、qal形に読まざるを得ない。BHS及びW.Zimmerli ,BK XIII / 1, 140参照。
- 48) 詩143, 4参照。
- 49) 詩147は、第IIイザヤ(特にイザ56章以下)の影響を否定し得ない。2節、13節から、恐らく、ネヘミヤによる城壁完成後に成立したと推定できる。つまり、5世紀の終わりである(ネヘ12, 27以下)。H.J.Kraus,BK XV /2 1136；詩34も捕囚中あるいは捕囚後のものと思われる。H.J.Kraus,BK XV / 1, 418参照。
- 50) イザ11, 12；56, 8；イザ60, 1以下；62, 11-12参照。
- 51) C.Westermann, ATD19. 692.
- 52) H.J.Kraus,BK XV /1, 421.
- 53) H.-J.Fabry, ThWAT IV, 444.
- 54) חָרַב；(=חַרַב)の意味はHAL 212によれば、1) zerschagen イザ53, 10；gedemütigt イザ57, 13(חַרַב)；詩34, 19(חַרַב)；2) Zermalmtes=Staub=?Totenland 詩90, 3。イザ57, 15にはחַרַבとחַרַבが並んで出て来

- る。「わたしは、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命を得させる」(新共同訳) **וְרוּחַ שְׁפָלִים וְלֵב נִדְכָּאִים** は同義並行関係であるゆえに、**וְרוּחַ** について言えば **וְרוּחַ** と **וְלֵב** は全く同義と考えて良いはずである。
- 55) エレ20, 9 23, 9 ; イザ66, 14 ; 詩22, 15 ; 102, 4-5 ; 箴15, 30 ; 箴14, 30 参照。
- 56) A.R. Johnson, *Vitality*, 69-71; K.M. Beyse, *ThWAT VI*, 326-332 (特に331) ; HAL 822 参照。
- 57) H.J.Kraus, *BK XV /1*, 328.
- 58) HAL 574.
- 59) H.Wildberger (*BK X /2*, 710) は、この表現はイザヤが聖戦伝承からとり入れたものと考えた。だが、彼は **וְרוּחַ** を3節からの Glosse としてこれを削除する (699)。
- 60) K.M. Beyse, *ThWAT VI* 329 参照。特に **וְרוּחַ** と並ぶ場合、HAL 822 ; 箴14, 30 参照。
- 61) O.Plöger, *BK XVII*, 184.
- 62) エレ4, 14 ; エレ31, 33a ; 詩64, 7.
- 63) 最初の文は、LXX, S とともに疑問形に訳すべきである。7節bと文脈上の連関を保つには、H.J.Kraus, *BK XV /2*, 605 参照:a) **עוֹלָה עוֹלָה** 「悪」(Bosheit) の複数形であろうか? **תְּעִלְמוּתֵינוּ** (「我々の秘密」Heimlichkeit) の提案 (HAL 754 ; H.J.Kraus, *BK XV /1*, 605) は7節bの内容に合致する。b) 直訳「我々はその陰謀を達成した」。c) MTによれば、「その男の内部と心とは究め難い」。詩文のリズムを生かすには **אֲנִישׁ** と読み替える (エレ17, 9 参照) か、**וְאִישׁ** とすべき。BHS 参照。
- 64) H.J.Kraus, *BK XV /2*, 607 参照。
- 65) H.W.Wolff, *Anthropologie*, 72-73.
- 66) **בְּפִימוֹ** (pl. suffix) に読み替える。BHS 参照。
- 67) LXX, S, T に従って、**פִּימוֹ** と読む。
- 68) BHS 参照。
- 69) BHS 参照。W.Rudolph (64), A.Weiser (88) は、3節と4節の間に7節を持つてくることを提案する。
- 70) **וְרוּחַ** が **וְרוּחַ** の中にあるという前提があるとすれば、神の行為は、まず「体中」(im Leib) で、そして「心臓の上で」(auf dem Herzen) 深化発展することになる。つまり、人間の力では全く不可能な所で、神の行為が進行するのである。
- 71) 出31, 18 ; 34, 27-28 ; 24, 7 他参照。
- 72) 詩51, 12 参照。ここでは **וְרוּחַ** の代わりに **בְּרוּחַ** が用いられている。この動詞は神のみが主語となる。またエゼ36, 27では **רוּחַ** を伴って、**רוּחַ** (mein Geist) が目的語となっている。これらは、この定式のヴァリエーションと認められる。
- 73) BHS (3人称複数の語尾に読む) 参照。
- 74) HAL29.
- 75) W.Zimmerli, *BK XIII*, 874.
- 76) 「姦淫の霊」; ホセ4, 12 ; 5, 4 参照。
- 77) W.Zimmerli, *BK XIII*, 146によれば、8-10節は前587年以後のエゼキエルによる付加とする。
- 78) W.Zimmerli, *BK XIII*, 879.
- 79) H.W.Wolff, *Anthropologie*, 54, 89.
- 80) W.Zimmerli, *BK X III*, 1262-1265 (Exkurs 3, **וְרוּחַ** im Buch Ezechiel).
- 81) R.Albertz/C.Westermann, *THAT II*, 751.
- 82) J.Scharbert, *FSA.Deissler*, 91.
- 83) H.W.Wolff, *Anthropologie*, 66.
- 84) R.Albertz/C.Westermann *THAT II*, 748 ; W.H.Schmidt, *Altth.Glaube*, 122 参照。
- 85) J.Scharbert, *FSA.Deissler*, 90.
- 86) **וְרוּחַ** 定式は以下の通り ; 民11, 29 (J) ; イザ37, 7 (= 王下19, 7) ; イザ42, 1.5 ; エゼ11, 19 ; 36, 26-27 ; 37, 14 ; 代下18, 22 (= 王上22, 23) ; ネへ9, 20 ; E.Lipin'ski, *ThwAT V*, 696-697 参照。
- 87) **וְרוּחַ** : **וְרוּחַ** 1, 13 (目) ; ヨブ17, 9 (手) ; 詩12, 7 ; 箴13, 26 (言葉)。その他、**וְרוּחַ** **וְרוּחַ** **וְרוּחַ** **וְרוּחַ** 詩57, 8 ; 詩108, 2 ; 詩112, 7 参照。

קֶרֶב (*qereb*) : Study of an Old Testament Anthropological Concept

Ogushi, Hajime

The aim of the present paper is to analyze the Hebrew word קֶרֶב (*qereb*) as one of the basic anthropological concepts of the Old Testament. It is rarely used to refer to the basic physical meaning “entrails” in regard to people in the Old Testament; this meaning is applied in the context of sacrificial animals. קֶרֶב is connected with other anthropological concepts such as נֶפֶשׁ, לֵב, רִיחַ, etc. Both לֵב and נֶפֶשׁ are located in the human “body,” or בְּקֶרֶב. So קֶרֶב is understood as the seat of life. Various emotions and thoughts also arise within the קֶרֶב. The prepositional formulation בְּקֶרֶב (“in the *qereb*”) especially emphasizes the psychological connotations of the term. In the later prophetic eschatological texts the formula יָתֵן בְּקֶרֶב (“give…in the *qereb*”) is used to illustrate God’s promises regarding the creation of the new human being (Ez 11 : 19 ; 36 : 26 ; Jer 31 : 33aβ).

Keywords : Entrails, inward parts, body, anthropology of the Old Testament, seat of life